山菜利用を介した里山と地域住民の社会的関係に関する研究
－上ノ国町を事例として－

森林資源科学講座 森林資源生物学分野　　好田美穂子

[研究目的]

かつて地域住民の生活や生産に不可欠な資材供給の場であった里山は、その多くが入会地として共同管理のもとに置かれていた。しかし、①明治の地租改正等により林地が国有地もしくは私有地化したこと、②昭和 30 年代以降、木材生産を主とした森林利用が進んだこと、③地域住民の生活様式が急激に変化したことによって、こうした入会的な利用は薄れていった。

近年、環境問題の顕在化等により、森林ボランティア活動、漁民や企業による植林等、里山の今日的な再生をめざす活動例が数多く報告されている。しかしながら今後は、これらの新しい動きをふまえつつ、地域住民の物質的、精神的な生活の場としての里山の在りかたにも目をむけてゆく必要があろう。なぜなら、地域住民は、地域の自然条件に最も適した形で森林を利用してきた歴史をもち、その利用形態には様々な生活の知恵が蓄積されていると考えられるからである。

そこで、本研究では、日常的に利用される山菜に着目し、その利用の実態を把握し、地域住民と森林との社会的関係を明らかにすることを目的とする。

[調査方法]

調査対象地は、林野率が 91%と高く、豊富な山菜資源を有する桧山支庁管内の上ノ国町とした。比較的高頻度で山菜採取を行っている町内在住者 38 名と市場関係者への聞き取り調査を行った。調査内容は、山菜資源の採取状況と利用状況についてである。調査対象とした山菜は、融雪期の 3 月から 7 月にかけて山野に自生する食用植物とし、きのこ類は含めなかった。

[山菜資源の採取状況]

①採取物の種類、時期、場所：　3 月中旬から 6 月下旬にかけて採取、利用されていた山菜は全部で 28 種類であった。採取場所は町内のほぼ全域に及んでいたが、ユキザサ、ギョウジャニンニクなどは、融雪時期の違いから場所を変えつつ長期にわたって採取されていた。居住地近辺の山野は、短時間かつ比較的容易に必要量の採取ができるため、とくに車を運転できない高齢者に好まれる採取地となっていた。

②採取行為：　採取期間は 1 ヶ月～4 ヶ月間と個人差が大きいが、毎日行くという人が 10 名、週 3～4 回行くという人も 10 名いた。採取には友人を同伴する場合が多かったが、1 人でも行くという人が 16 名いた。採取の目的は、採取行為そのものを楽しむ以外に山歩きを楽しむこと、景色を眺めることや植物の観察等が挙げられた。80 才の女性 O.S さんは、居住地近辺での山菜採取を毎日 1 人で行う。山菜採取は生きがいであり、山は自身の生活を精神的に豊かにしてくれる感謝の対象でもあった。

[山菜資源の活用状況]

採取した山菜は、自家消費する以外に贈答と販売に活用されていた。自家消費のみを行っていたのは対象者 38 名中 2 名であり、自家消費と贈答を行っていたのは 27 名、自家消

費と贈答及び販売を行っていたのは 9 名であった。贈答に配分する量が最も多いと答えた人は 18 名であり、販売に配分する量が最も多いと答えた人は 4 名であった。

①自家消費：　自家消費にはすぐに料理され食されるものと、保存されるものがあった。主な保存方法は、フキやネマガリタケは塩漬け、ゼンマイ、ワラビは乾燥であった。保存利用の多いフキ、ゼンマイ、ワラビ等はこの地域で盆や正月にかかせない煮しめなど伝統的料理の材料として用いられていた。Y.H さんは、親から教わったフキの漬物や塩漬けを毎年大量に作り、料理に用いる。ウドやフキの塩漬けの際はイタドリの葉をひくと変色せずに美味しく食すことができることも親から受け継いだ知恵である。また、親から教わったウドの酢味噌和えからヒントを得てアサツキの酢味噌和えを自分で試してみたところ、美味しいと家族の評判がよかったという。また、ワサビは味噌漬け、塩漬け、醤油漬けと多数の料理法を使い分けている。自分やおいしくて大好きと言う家族、近所の人のために親から教わった料理法に工夫を加えて楽しんでいる。

②贈答：　贈答には、自家消費の利用頻度が高いウド、フキ、ゼンマイ、ネマガリタケなどの山菜が多く用いられていた。贈答先は町内外の親戚や友人であったが、特に居住地近辺の人への贈答が多かった。さらに山菜を贈り、魚や野菜等を返礼にもらうという物々交換を 24 名が行っていた。K.T さんは毎年大量の山菜を近所の友人や親戚に贈答する。平成 11 年の 5 月上旬から 6 月上旬にかけて 11 回、20 軒への贈答を行った。贈答に用いた山菜は、利用頻度の高いゼンマイ、フキ等を含む 7 種類であった。贈答先の 7 軒からは野菜、魚等の返礼があった。K.T さんは採取や加工に手間のかかる山菜の贈答を行う理由を「近所付き合いを深めるため」であると述べた。「冠婚葬祭等の際は近所の人の助けが必要」であり、そのために「普段からの日常的挨拶や行事への参加に加え、山菜の贈答も大事」である。このように対象者のほとんどが行っていた贈答は、単なる物のやり取りだけではなく、「近所付き合い」という地域生活にとって不可欠な人間関係の維持を望む気持ちを反映したものと考えられた。

③販売：　販売対象となっていた山菜は、ギョウジャニンニクやウドなどであり、主な販売先は、JA 上ノ国、札幌市場、近郊の加工場等であった。山歩きを趣味とする 80 才になる K.S さんは、実益を兼ねて JA 上ノ国への出荷を行い、1 日 1～2 万円、年間 20～30 万円の収入をあげていた。また、年金生活者の H さん夫妻は生薬会社と JA 上ノ国への出荷を行い、全収入の 17%に相当する出荷額を得ていた。すなわちこれらの山菜は、高齢者の現金収入源としても重要であるが、近年における資源の減少が、当事者のみならず市場関係者にも憂慮される対象となっていた。

[まとめ]

上ノ国町住民は、山菜採取を通して、場所的にも時間的にも広範囲かつ日常的に森林を利用している。その理由は、山菜が趣味としての精神的満足感、豊かな食生活、現金収入といった個人的な利益を提供しているだけでなく、地域住民間のコミニュケーションにも極めて大きな役割を果たしているからである。

以上のことから、地域住民が精神的にも物質的にもより豊かな生活を送るためには、こうした日常的な住民的利用の場としての森林が有効であり、そうした場としての里山の保全や回復が不可欠と考えられる。また、人間と森林との関わりの全体像を知るためには、過去から現在にいたる森林と地域住民における社会的な関係の意義をさらに多方面から究明する必要があると考える。